

特別講演 2

「外来を愉しむ 攻める問診」

藤田保健衛生大学 総合救急内科教授

山中 克郎 先生

優秀な内科医は問診だけで鑑別診断をかなり絞込みます。若手医師は大切なキーワードを聞きだせないために、たくさんの検査に頼り検査の異常値から診断を探ろうとします。検査に頼るとたまたま出た検査の異常値のために診断が全く違う方向にずれてしまうことがあります。患者さんの訴えには診断に重要なヒントが隠れています。

不安を持って訪れる方には「それは辛かったですね」と心から共感を持って接し、最初の3分間で患者さんの心をつかみます。このステップはとても重要です。患者さんは全てを我々に語りません。心が通わないと重要な情報が聞きだせなくなるのです。

次に鑑別診断が少ないキーワード（例えば右下腹部痛）を見つけたら、キーワードから連想される疾患をいくつか想起します（虫垂炎、憩室炎、カンピロバクター感染症）。虫垂炎だなどと思ったら典型的な虫垂炎の症状と所見をパッケージにして質問することにより診断をより確かなものにしていきます。鑑別診断に大切な重要なポイントを明確にする『攻める問診』を行うことが大切だと思います。